

**第20回学会発表のまとめ**

**アドルノの自然美学の（ウン）アクトゥアリテート**

**「自然の言語」を中心に**

**府川 純一郎（社会学研究科博士後期課程）**

本報告では、テオドーア・W・アドルノが『美学理論』自然美章において使用した「自然の言語」概念の検討を行い、この言語が、投影的位相と自然発話的位相の、二つの位相によって構成されていることを明らかにした。

考察の起点は、現代的自然美学の確立を標榜するマルティン・ゼールの批判である。自然美章でアドルノは、自然が意味を有して観察者に迫ってくる時、自然が観察者に語りかけてくる時、自然は美しくなると主張した。だがゼールは、その著者『自然美学』において、アドルノはこの言語経験を論じる際、自然の背後に言語を発する主体相似的なものを密かに想定しており、この理論にはそれによって反現代的な、「形而上学への逆行」を引き起こしていると、その現代性を否定したのである。

報告者は先行研究並びに自然美章の詳細な読解を通じ、この批判の妥当性を検証した。そこで確認されたのは、主要な研究者（その代表としてはヨーゼフ・フリュヒトル）が

この言語を、観察者の志向の自己還元によって説明、擁護したことである。『啓蒙の弁証法』が示した通り、人間は自然による支配という「神話的呪縛圏」から啓蒙と自然支配を通じて抜け出したが、対自然機構としての社会は個人への抑圧性を高め、遂には「第二の自然」という巨大な呪縛圏として現出した。そして無力化された第一の自然は、今や呪縛圏の外部であるかのように現れ、主体の非同一を求めるユートピア的関心が投影される舞台になる。先行研究ではこうした歴史的前提を踏まえ、アドルノの自然の言語を、自然に無意識に投影した関心が投影者自身に逆照射したものとして、つまりは主体の秘められた言語として理解してきたのである。報告者はこうした投影的解釈に正当性を認めつつも、それらが自然美章の細部で示唆されている、もう一つの位相を十分に捉えきれていないことを示した。アドルノは自然の言語は「人間の内部に属するもの全てを凌ぐ」と述べ、それが（無意識を含んだ）主体の自己還元以上のものであることを指摘している。報告者は、彼が鶯の声に美しさと同時に恐怖感を覚え、その原因をその声が歌声ではなく、拘束的な呪縛に従っているからだ、と記した一文を糸口に、彼が自然存在も、食ったり食われたりという神話的呪縛圏の中に本来的にあると理解していたこと、さらにはそうした自然存在もユートピア的関心を持ち、その不確かで瞬間的な表現が自然の言語を構成すると考えていたことを明らかにした。またこの自然を人間と同じ救済乃至宥和状態への移行を求めるものとして捉える自然観には、『ドイツ悲劇の根源』からの影響が見受けられ、彼の自然美論には、この神学観が世俗化されつつ、隠れた通奏低音として機能していると結論づけた。

自然発話的位相の存在を明確にしたことにより、本報告はゼールの「形而上学」という批判の妥当性を大筋において認めることになった。質疑において加藤泰史先生が御指摘されたように、今後の課題は、この妥当性を認めた上で、ゼールの自然美論を支持するのか、或いはアドルノの自然美論を擁護し、自然美学の今日的議論との生産的接続を探るのか、明確な方向性を打ち出すことにある。報告者は後者の可能性として、「自然主体」概念を戦略的に導入するゲルノート・ベーメの試みを念頭に、自然中心的美学に求めていることを示し、差し当たりの回答とさせて頂いた。またアドルノの内在的解釈の面では、二つの位相の弁証法的関係への認識をさらに深めることが課題となるだろう。